

魔法の medicine プロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 山下 真由 所属: 広島市立広島特別支援学校 記録日: 2021年2月25日

キーワード: 重度重複障がい、肢体不自由、観察、要求、環境調整

【対象児の情報】

・学年 中学部 2年生 男児

・障害名 重度重複障がい(脳性まひ)

【活動目的】

・当初のねらい

1 刺激に対しての反応を観察することで好きな刺激やリラックスできる環境を探る。

2 日常生活での本人の様子を記録や好きな遊びで見られる表出場面の観察を通して、少しでも本人の気持ちを汲み取ることができる。

3 本人のコンディションに合った活動を、睡眠リズムや快眠度などを基に考えることができる。

・実施期間 2020年6月2日～2021年2月

・実施者 報告者と同じ

・実施者と対象児の関係 担任

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

1 刺激に対しての反応を観察することで好きな刺激やリラックスできる環境を探る について

○ 刺激について

好きな刺激は、揺れである。移乗のときなど抱き抱えられたときに、期待感を表すように笑顔になる様子が見られる。同時に楽しいと感じると、身体に力が入ることが多い。

○ 姿勢について

抱き抱えたときは、期待を感じて笑顔になるが、一方で身体に力が入り、リラックスはできていないと感じる。座位保持椅子に座ると、眉間にしわが寄ったり、覚醒が下がったりする場面が他の姿勢のときより多く見られる。学校で過ごす時間の多くは、座位保持椅子である。ベンチ椅子に介助を受けて座ると、表情はよいが、緊張が入り、後ろに身体を反らせようとする人が多い。右側臥位が対象生徒の楽な姿勢である。

2 日常生活での本人の様子を記録や好きな遊びで見られる表出場面の観察を通して、少しでも本人の気持ちを汲み取ることができる について

揺れると笑顔になり、また後方に上半身を反らせて頭が下がると発声が増える。揺れ遊びを止めたときに、反応(右手を動かす、発声する、頭を後ろに反る、抱き抱えている教師の方に顔を向ける)が見られている。

3 本人のコンディションに合った活動を、睡眠リズムや快眠度を基に考えることができる について

睡眠リズムが不規則で、登校時は、半数以上眠っている。学校でも授業中に、眠り始めることがある。睡眠時間が短くても朝早くに目を覚ます日もあったり、10時間以上眠っていても、朝起きなかつたりする日もある。体調面で変わったところが見られなくても、急に体調が悪化することがあり、ぜい鳴が増え、吸引、酸素療法が必要などときがある。小学部のときは、授業時間に寝ていることがあり、昨年度中学部1年生のときは、刺激が少ない授業の場合にうとうとし始めることが見られていた。

・活動の具体的内容

1 刺激に対する反応を観察することで好きな刺激やリラックスできる環境を探る について

① 使用した機器：主にカメラ

実施した時間帯：14時前後の自立活動の時間

② 仰臥位、側臥位、座位保持椅子、ベンチ椅子での様子を定点カメラの動画や写真で観察をした。

○ 刺激は、対象生徒が好んでいるだろうと以前から観察しているものから、次の事柄を設定した。

1: マッサージ機の振動(写真1)。2: 教師の手でじんわり触れる。3: 教師の手でトントンと触れる。4: 甘い匂い。5: 音。6: 腕に、重さを感じる。7: マットローラーによる背中側からの全身への振動(写真2)。8: 水スプレー(写真3)。9: 手のひらで物に触れる。

○ 姿勢について、揺れ遊びなど、楽しい活動を行った後や、1時間程度、座位保持椅子に座ったままの授業の後やベンチ椅子での学習の後など、身体に力が入る場面の後には、右側臥位を取る時間と、教師が本人の体との接地面をなるべく多くもてるように、リラクステアの代わりようになり、適度な揺れを与えることを行った。

③



写真1 マッサージ機の振動



写真2 マットローラーによる
背中からの振動



写真3 水スプレー

2 日常生活での本人の様子を記録や好きな遊びで見られる表出場面の観察を通して、少しでも本人の気持ちを汲み取ることができる について

① 使用した機器:カメラ

実施した時間帯:10時前後の学習の始まる前と日常生活の場面

- ② 抱き抱えた姿勢で、揺れ遊び(写真4)を繰り返す。途中で、揺れを止めて、何らかの反応があれば、揺れを再開する。反応として、頭を後方に反らす、発声、右手を伸ばすことと合わせて、上半身をやや前傾にさせる場合がある。頭を後方に反らせた場合、反りすぎないように支えながら、揺れ遊びを再開する。発声、右手の動きが見られたときも遊びを繰り返した。上半身を前傾にさせたときには、上半身をさらに、前傾位になるように促しながら、揺れを再開する。

また、一日を通して、揺れ遊びを止めたときのアクションと同じ動きが見られるか(写真5)を観察する。

③



写真4 揺れ遊び



写真5 揺れ遊びではない場面(クッキングでの試食後)、頭をヘッドレストにあてる動きを繰り返す場面

3 本人のコンディションに合った活動を、睡眠リズムや快眠度などを基に考えることができる について

① 使用した機器:アプリ ぴよログ、アプリ Google カレンダー、Excel

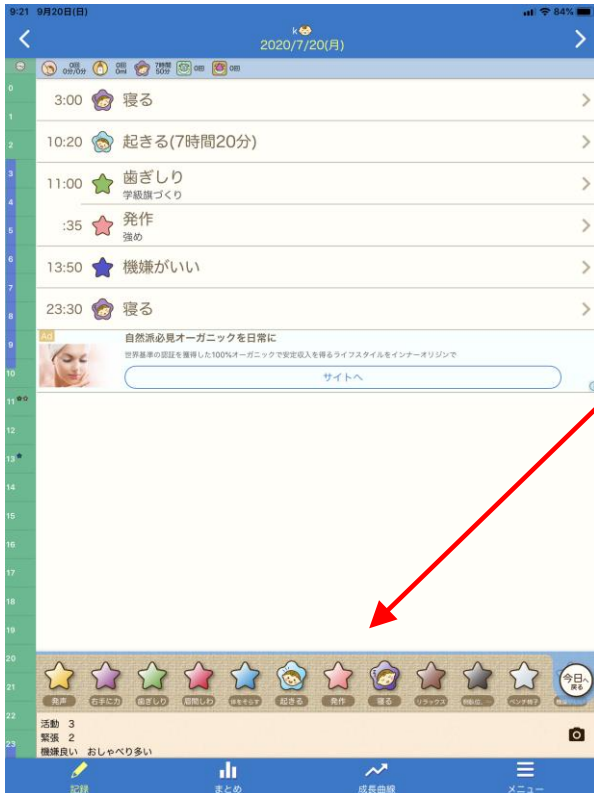
実施した時間帯:ほぼ毎日、主に放課後と朝連絡帳を見て記入。その場面が見られたときに、即時に入力する。



- ② ぴよログに入眠時間、起床時間、活動量、機嫌、緊張度合を連絡帳の記入を見たり、本人の様子を観察したときに記録したりする。そのメモをもとに、主に Excel に一か月ずつまとめ、考察をした。



③



このいろいろな色の☆をタップすることで、簡単に様子が記録できる。☆の項目について、発声、歯ぎしり、身体を反らせるなど、記録したい項目をあらかじめ設定している。

アプリ ピよログの記録画面

・対象児の事後の変化

1 刺激に対する反応を観察することで好きな刺激やリラックスできる環境を探る について

○ 刺激について

1: マッサージ機の振動

仰臥位で右腕、左腕、お腹、右足、左足、肩と、身体の部位を変えて、振動を与えた。介入前、介入中、介入後と観察した。日によって、眼球のみ左右に繰り返し動かし、じっとしているとき、右手を動かすとき、発声があるときなどの様子が見られた。日を変えて観察したが、決まった様子は見られなかったが、眉間にしわを寄せて、嫌がる様子はなく、好んでいる刺激であると解釈した。両手を伸ばして、手の平で振動を感じることができたときに、緊張を緩めたまま、振動を感じることができた。

2: 教師の手でじんわり触れる

楽しそうに動いている様子(側臥位⇔仰臥位への半寝返り)が多く見られるときに、右腕、左腕、右足、左足、胸、背中を触れることと、手で圧をかけて握るように触れることを行った。刺激を感じているときには、動きが減少し、刺激を止めると再度動きが始まった。体に触れられることを受け入れていると考察する。

3: 教師の手でトントンと触れる

マッサージ機の振動は好んでいると観察したが、振動の刺激は観察の結果から、本人にとって、弱い刺激かもしれないと思い、マッサージ機の振動より、強い刺激となるように、教師の手でトントンと触れる刺激を与えた。右腕、左腕、お腹、右足、左足、肩と部位を変えると、両肩をトントンと触れる刺激で笑顔になる様子が見られた。また、2、教師

の手でじんわり触れる場合と同様に、介入前は、動きが見られていたときに、トントンと触れることで、動きが止まる様子が見られた。

4: 匂い

様々な活動で、匂いを感じながら、学習できるように設定している。美術で紙粘土にバニラエッセンスを加えて、好きな食べ物としてパンを作成するときに、口をパクパクしたり、興味をもった表情になるなど、表情を変えたりしていた。そこで、歯ぎしりが見られたときに、バニラエッセンスの匂いを与えると、歯ぎしりがとまる様子が観察できた。歯ぎしりが始まる要因は、分かっていないが、活動として、本人にとってあまり好んでいないことや、座位保持椅子に座って移動したり、待っていたりするときなどに多く見られている。

5: 音

ミキサーを回す音に、ピクツと体に力を入れてびっくりする様子が見られた。他の場面でこのようにびっくりする場面は見られていない。

6: 腕に、重さを感じる物をのせる

腕で重さを感じる経験はあまりなかったが、大根の種植えの授業で、大根を腕にのせた所、「ん？」といった表情となった。3キロ程の重みがあるぬいぐるみを腕にのせると、はらいのけず、じっとしている様子が見られた。

7: マットローラーによる背中側から全身への振動

マッサージ機の振動よりも大きく、また頭から足までの背中側の部位でガタガタする振動を感じると、介入中は、身体の動きはなく、笑顔になった。振動を止めると身体を反らせる、頭を少し上げる、右手を伸ばす動きが見られた。

8: 水スプレー

座位保持椅子やベンチ椅子で全身に水しぶきを与えた。水しぶきがかかった瞬間は、動きが止まり、その後、表情を緩ませて、好んでいると観察できた。介入後には、座位保持椅子の時には、ヘッドレストに頭をあてる様子、ベンチ椅子の時には、後方に反らす動きが見られた。

9: 手のひらで物に触れる

物に触れると、手の動きや表情などの変化している。握り込みやすい大きさの物に触れることで、指を動かし始める様子が見られている。

【考察】

○ 刺激について

1~9の場面での観察から、身体に触れられるという刺激を受け入れやすいのではないかと推測できる。本人にとって、心地よく感じることはできるには、強さが必要であるかもしれない。好きな遊びとして、揺れ遊びに加え、身体にトントンと触れられることや水がかかることといった、皮膚感覚や固有感覚を刺激することを受け入れやすいのではないか。

○ 姿勢について

楽しい活動の後や座位保持椅子に座っている時間が長かった後に、側臥位でリラックスする時間を取るようにした。側臥位になると、上半身に入っていた力が抜け、じっとしていたり、眠る前に見られる口をパクパクする動きが見られたり、歯ぎしりがとまったりする様子が観察できた。

ベンチ座位を取るときに、今までは、力が入って、後ろに反ることが多かったが、先日、対象生徒の膝にクッションを置き、その上に腕をのせる形で、後ろの支えはなくとも、一人で座る様子が初めて見られた(写真6)。同様に机に体を預けることがスムーズにできるようになったり、力を入れたりすることが少なくなってきた。

また、いろいろな学習場面において、身体に触れられている感覚をもてるように、できるだけ、座位保持椅子から降りて、教師と一緒に座る時間をもつようにした。座位保持椅子に座っていると、左腕が側腹部に入り込みやすいが、教師がリラクスケアのような役割をすることで、左腕の緊張が緩み、腕を伸ばすことがしやすくなった(写真7)。その後、座位保持椅子に座ったときに、左腕が側腹部に入り込まず、座りやすいことが何度もあった。



写真6



写真7

2 日常生活での本人の様子を記録や好きな遊びで見られる表出場面の観察を通して、少しでも本人の気持ちを汲み取ることができる について

揺れ遊びでの観察により、記録を取った日(15日)の合計の反応の数89回中、58回(全体の65%)が後方へ頭を反らせる、10回(全体の11%)が発声、21回(全体の23%)が右腕を伸ばしながら、前傾になるという結果であった。動画を振り返ると、揺れが止まって、なかなか反応がない日と、反応がすぐに見られる日があった。活動時間を反応回数で割ると、なかなか反応が見られない日は68秒、もっとも反応が早い日は18秒であった。平均として、1~5回目では、25秒、6~10回目では50秒、11~15回目では19秒で、反応が早くなっていることが分かる。反応がなかなか見られない日において、揺れ遊びを実施したときの様子として、覚醒が低い場面であった。今後、刺激を受けて、どのくらいで反応があるかについても、体調や覚醒の指針になるかもしれないと考える。

15回を3回に分けて、考察すると、後方へ頭を反らせる回数58回の中では、1~5回目31%、6~10回目25%、11~15回目43%、発声の回数10回の中では、1~5回目20%、6~10回目10%、11~15回目70%、右腕を伸ばしながら、前傾になる回数21回の中では、1~5回目47%、6~10回目14%、11~15回目38%であった。11~15回目の方が、全体として、要求と見られる表出が増えていることが分かる。

	時間÷反応回数 (秒)	頭を反らせる(回)	発声(回)	右腕を伸ばしながら、前傾になる(回)
1~5回目	25	18回(31%)	2回(20%)	10回(47%)
6~10回目	50	15回(25%)	1回(10%)	3回(14%)
11~15回目	19	25回(43%)	7回(70%)	8回(38%)

また、好んでいる揺れ遊びをするとき以外で、座位保持椅子に座っているときに、頭を後方に反らせて、よい表情になることが見られている。その様子が見られたときに、座位保持椅子でもすぐにできるかつ好んでいる刺激として、肩へ触れて振動を与え、再度、後方に反らす動きが見られたら、肩に触れることを繰り返している。また、機嫌のよい日の午後には、仰臥位で、後方に頭を反らしたり、右手の肘を伸ばしたりする動きと笑顔と発声が観察できた。側臥位から仰臥位へ、姿勢を自ら変えるときも、快の表情になっていることが多く、頭を後方へ反らすことは、快反応の表出であるのではないかと考察している。風船ベットを揺らしたり、マットローラーに乗り、背中から振動を感じたりするときなども刺激を止めると、頭を反らせたり、右手を動かしたりしている。

3 本人のコンディションに合った活動を、睡眠リズムや快眠度などを基に考えることができる について

小学部の時は、授業で眠っていることがあるという印象をもっていた対象生徒だが、最近では、授業が始まった後に、うとうとして眠たい表情をする日がなくなった。授業中に、眠ってしまう心配はなく、生活リズムは安定している。授業時間において、午前中に眠った日は、1日、午後眠った日が3日。揺れ遊びによる前庭感覚や、固有感覚へ刺激はなくとも、起きて参加することができるようになっている。入眠時間と起床時間は、安定していないが、早く就寝できる日が増えていることが、良いリズムに関係していると考え。睡眠時間を記録に取ることで、朝6時近くに目を覚ました日のうち、8割の日は、二度寝をしていることが分かった。そうすることで、授業が始まるまでには目を覚まし、学習に参加する構えを作っている。

医療的ケアや授業の合間、給食の前などの休憩時間以外は、しっかり学習に取り組むことができ、活動量が保障されることにより適度な疲労感から、スムーズな入眠ができるのではないかと考察する。疲労が溜まっていると思われることはないので、現在の活動量が適していると考え。給食後の注入時に、少し眠ることもあるが、その日に夜眠らずに、生活リズムが乱れることはなかった。午後、30分程眠った後には少しずつ刺激を与え、目を覚ますことができた。以前ではあれば、昼間に眠ることで、夜なかなか寝ないかもしれないと思うことがあった。今では、少し夜寝ることが遅くなくても、朝の授業には起きることができようと思うことができている。中学部2年生になった当初は、睡眠時間や快眠度が、翌日の覚醒と関係があるのかもしれないと考えていたが、2年生になって、1年生の時より更に、学習時間に眠たそうにすることはなくなり、疲労の度合、覚醒の度合、共に今のコンディションと活動量が合っていると感じる。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

記録をもとに、日々の様子を観察することによって、いろいろな場面での「~かもしれない」の見立てに自信をもてるようになった。本人の好きな事が一番のヒントで、その事柄の量を変えることで、活動調整や環境調整となったり、体調把握の目安にもなったりした。また、その事柄の提示の仕方を変えることで要求の発信の場面の学習となると感じた。

・その他エピソード

学校においても、家においても、大きな声で発声して要求していると思われる場面がある。ベットなどに一人でいるときや、下校前などバギーに座って、帰る準備をしているときなどに大きな声を出す場面が多い。授業の中や、一緒に活動をしているときにはあまり見られない。本人の中で、物足りないとき、側に誰か来て欲しいときがあり、その気持ちを表現するようになっているのではないかと見立てている。